対面リーディング通信

2014年
４月

2014年4月1日 発行　　第１５４号（隔月刊）

少し懐かしい香りがする読書グッズ

～ 読書記録しおり ワタシ文庫 ～

対面リーディングのボランティアの皆さまは読書好きの方が殆どだと思いますが、読み終えた図書の記録はしておられますか。

文房具クリエイター・阿部ダイキ氏によるステーショナリーブランド、ベアハウスから図書館の貸出カード型のしおり「読書記録しおりワタシ文庫」が発売されました。しおり3枚に専用ノリ付封筒1枚が付いて450円（税別）です

しおりとして使用できるほか、読んだ本を記録する事ができます。貸し出しカードと同じように手書き欄が設けられ、読み始めた日、読み終えた日、本のタイトル、著者名、そして簡単な感想も書き込めるようになっています。付属の専用封筒で手帳などに貼り付けておけば、自分だけの読書記録が作れます。

また本物の貸し出しカードの少しざらついた質感を出すため、本体用紙にはケナフ100GA（非木材であるケナフパルプを100 %使用し紙表面に塗工処理が施されない「非塗工紙」）を使用し、印刷もあえて粗い活版印刷風の仕上げています。また本物の図書館グッズメーカーに依頼し、貸し出しカード用のブックポケットとセットにするなど、随所に本物志向の仕上げをした点も好評。

西陽さす放課後の図書室を彷彿させるグッズはいかがでしょうか。

対面リーディングの記録にも使えますよ。

今月号の主な内容

対面リーディングと私	ことばとわたし	植田　純子	2
対面リーディング難所物語	群像の書評欄の音訳を拝聴して　３	二村　晃	3
私のふるさと	ふたつのふるさと	数又　幸市	4
誌上勉強会	図表の読み方　３	木村　謹治	5
寄り道・回り道	フクロウのみせ　大阪	福田　直樹	１０
人と人生	アンドレア・ボチェッリ	澤井　稔	１１

対面リーディングと私

ことばとわたし

植田（うえだ） 純子（よしこ）

昨年１１月下旬から対面リーディングデビューした超新米です。よろしくお願いします。

私は、ことばに対するこだわりが強いほうだと思います。

５歳の終わり頃、大阪市内から電車と徒歩で１時間ほど南の地域に引っ越しました。のどかに広がる田園風景にびっくりしたものですが、何よりことばの違いにカルチャーショックを受けました。「～やんけ」「そうけ？」「なんでで？」などなど初めて聞くことばのオンパレードで、染まらないようにしようと幼心に決めました。自分は正しい大阪弁をしゃべっているという自負がそのころからあったようです。かわいくない子どもですね。

反対に、大人になってフルタイムの勤務のかたわら、旅行用に始めた英会話の勉強では積極的に染まるようにしたと見えて、比較的早く本場の発音らしきものを習得しました。おかげで、日系以外のアジア系らしい外見と相まって、海外で安全に一人旅ができました。

一方で、話すときはバリバリの大阪弁ですが、日本語の文章を音読するときは自動的に標準（共通）語風になることに、大人になってから気づきました。両親共に生粋の大阪人ですから、こちらはテレビの影響に無意識のうちに染まったようです。とはいえ、私はいわゆるテレビっ子では決してありませんでした。

小学生のころは外遊びやお絵かきに、中高生時代は陸上にうつつを抜かしていたので、同年代の子どもと比べてテレビを見る時間はかなり少なかったはずです。こだわりもさることながら、耳が生まれつきよかったのかなと親に感謝しています。

おかげで、３年前から地元で音訳活動をしていますが、アクセントやイントネーションですごく困ったということはありません。あ、大阪弁で書かれた文章はちゃんと大阪弁で読めます。

こんな私ですが、好奇心が強く多趣味で、人があまりしない経験が豊富なので、たいていの本は興味深く読めます。たくさんのリスナーの皆さんに対面リーディングや、今勉強中で10月からデビュー予定の録音図書でお耳にかかれる日を楽しみにしています。

80.『群像』書評欄の音訳を拝聴して（その３）

二村（ふたむら）　晃（あきら）

寒い日が続き、対面読書に図書館まで出かけることも少なくなって、今月もまた送って下さった音訳テープを題材に採り上げさせて頂きました。

毎月、林曠子先生門下のＮ‐ｂｕｎの皆さんが担当なさっている『群像』14年２月号の書評欄です。評者が採り上げた作品の評論で、作者顔負けの文学論を展開するので、その論旨も用語も難解で有名なコラムです。それでも、最近は随分理解しやすくなりました。

その音訳の一端をご紹介しましょう。

『舞台を降りた時、人は』タキイアサヨ‥タキはサンズイにリュウの旧字体、イはイドのイ、アサはアサガオのアサ、ヨはヨのナカ‥瀧井朝世。ニシカナコ著‥ホウガクのニシ、クワえる、ナラのナ、コドモのコ‥西加奈子。『舞台』講談社刊・税別定価1400円。

「西加奈子はずっと社会一般の価値基準と戦って来た作家だ。そんな彼女が新作『舞台』では、自意識にがんじがらめになった男を登場させる。主人公のヨウタは29歳。初めての一人旅、初めての海外旅行でニューヨークにやって来た。観光客を馬鹿にして、ホテルではなく滞在型アパートメントホテルに宿泊し、チェーン店ではなくローカルのダイナーに入店する。読み始めて直ぐに、彼の自意識過剰っぷりが滑稽に思えて来る」……そんな書き出しで、ニヤリ・クスリの連続だったと、自意識を悟られないように、自意識を発動する彼の姿の道化ぶりが披露されます。そして評者は、太宰治の『人間失格』の主人公、大庭葉蔵を登場させたのです。「ヨウタ」という名前に意味があったのですね。

「自意識過剰の主人公、名前がヨウタとくれば、『人間失格』の葉蔵が思い出されるが、ヨウタも中学生で、『人間失格』を読んで心酔したとある。自分の全てがそこに書かれていると思って、太宰の作品を読み漁ったというのだ。つまり本書は、葉蔵のような人間が現在に居たらという設定として、読むことが出来る」……こんな観点で名付けられたのが「ヨウタ」という主人公の名前なのですね。まず最初に漢字を教えて頂かなくっちゃ！「ヨウタ‥ヨウはハっぱのハ、タはフトい」と、「葉太」を理解させてほしかったですよ。洋太か、陽太かぐらいに思っていたので、太宰が現れて愕然としたのです。

「葉太の自意識には二通りある。他人に認められたいという自己顕示欲と、他人から批判されたくないという自己防衛欲求。葉太の滑稽なところは、この二つのベクトルが肥大化して、引き裂かれそうになっているところだ。“人生は舞台だ”というシェイクスピアの言葉は有名だが、その舞台から降りて生き続ける時、人は何を思い、どう振舞うのか？

著者は葉太を極限まで追い詰めて、その行動を追っていく」。

私が太宰治に夢中になったのは昭和22年、旧制中学４年生の時でした。旧制高校の入学試験が迫っているのに、彼の作品が読みたくて葛藤したものでした。現代に生きる葉蔵、『舞台』の上と下で演じる姿に、ぜひ会ってみたいものです。　〈つづく〉

ふたつのふるさと

製作部　数又（かずまた） 幸市（こういち）

節分にまく豆は大豆？　福島県で生まれ育った私にとって、1 年前に関西に引っ越してきて驚いたことのうちの１つです。福島では節分にまくのは『落花生』。節分の時期になると、スーパーには鬼の面が付いた落花生が並びます。その話を聞いて宮城や青森の方に聞いてみると、やはり落花生とのこと！

ところが茨城や落花生の本場・千葉では大豆をまくそうです。もしかすると「白河の関」がその境なのかもしれません。

そのほかにも「お好み焼きをおかずにご飯を食べる」「赤信号でもどんどん平気で渡って行く人がいる」など、驚いた（初めて知った）ことは両手でも足りません。

現在私が住んでいるのは、神戸市の長田区。神戸でも下町の雰囲気が濃い地域です。転居前は言葉や慣習の違いなどを不安に思っていましたが、住んでみるとその「下町らしい」雰囲気のおかげで、すぐに馴染むことができました。「コナモン」「そばめし」「串カツ」「ぼっかけ（牛スジ肉とコンニャクを甘辛く煮込んだ料理）」は、今では子ども達の好物になりました。そんな我が家で時折、作る福島の郷土料理が『いかにんじん』というものです。醤油・みりん・酒を煮立たせ冷ましたタレに、細く切ったスルメと人参を漬け込みます。松前漬の昆布抜きのような感じですが、簡単にでき、ご飯のお供や酒肴にもなりますので、皆さんも一度お試しください。

お正月に作った時の「いかにんじん」

そのほか神戸ライフの楽しみの一つとして、今年サッカーＪ１に復帰したヴィッセル神戸の試合観戦があります。１１人で試合をするサッカーでは、ファンは「１２番目の選手」と言われ、複数の歌（サポーターズソング）を歌いながらチームを応援します。選手入場前には『神戸讃歌』という曲がスタジアムにこだまします。チームが発足し、初練習の予定だった１９９５年１月１７日に阪神・淡路大震災が発生。選手の戦う姿を励みにしたサポーターが、越路吹雪さんの『愛の讃歌』にオリジナルの歌詞をつけてできた曲です。私はこの曲を歌う時、東日本大震災を経験し今は遠く離れた生まれ故郷・福島と、新たなふるさと・神戸への二つの思いを胸にします。今年は何回、スタジアムに足を運べるかなぁ。

『神戸讃歌』の歌詞

俺達のこの街に　お前が生まれたあの日　どんなことがあっても 忘れはしない
共に傷つき 共に立ち上がり　これからもずっと 歩んでゆこう
美しき港町　俺達は守りたい　命ある限り 神戸を愛したい

木村（きむら） 謹治（きんじ）

図表の読み方 3

― 系統図・家系図 ―

一見すればなるほどと思える図表でも、説明しようと考えれば考えるほど難しいですね。

対面の場合、図表を熟考した上で読むことはできません。即断･即決で読むしかありません。

不足する分は、会話力で埋めることです。

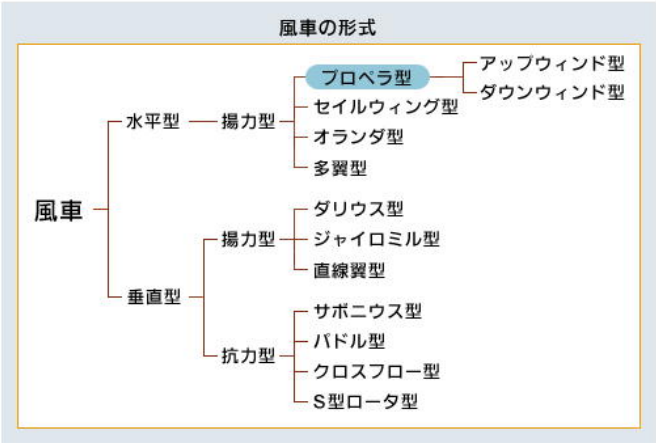
すなわち、「この説明でわかりますか？」「もう少し詳しく読みましょうか」など、臨機応変に利用者と会話をし、要望を引き出す技術も必要です。

今回で、このシリーズも３回目を迎えます。皆さまの、忌憚のないご意見・ご感想をお待ちしています。

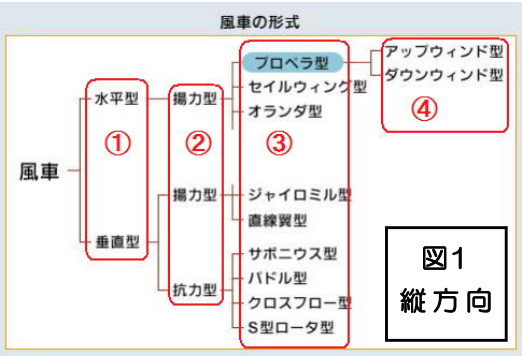
系統図　風車の種類

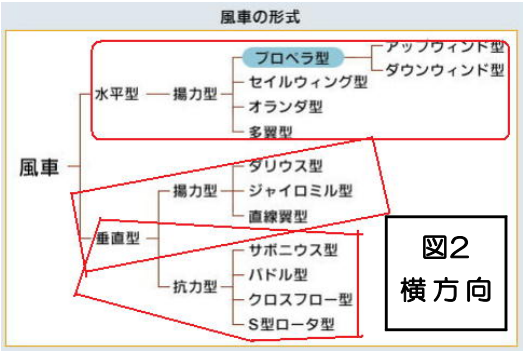
下記の図は比較的簡単な系統図です。プロペラ型が強調されていますが、ここでは無視して下さい。

風車は常に最大出力で発電できるわけではありません。風が吹かない日もあれば、毎日の風の強さも変わります。そのような風況（ふうきょう）に適した風車の選定も重要になってきます。



皆さんはどのように読まれますか？　縦方向？　横方向？　それとも、それ以外？





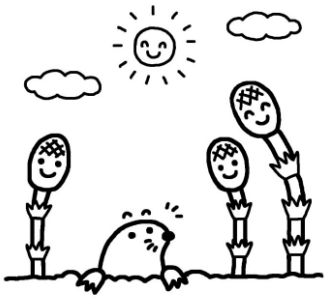
系統図や家系図なども前回のグラフと同じで、多くの情報を一つにまとめたものです。従って読み方は何通りも存在し、この読みが正解という風に１つに絞ることはできません。
一見してわかるのは、右に行くほど枝分かれして、項目が多くなっています。また「風車は水平型と垂直型」の2種類あるのがわかります。問題は、そこから先の読み方です。

この表を読むにあたって簡単に全体像をお知らせした方がいいかもしれません。
例えば『風車の形式を表す系統図です。大分類・中分類・小分類・さらに細い分類と４段階に分類されています』と。

続いて内容の説明です。
『風車は水平型と垂直型の２つに分類されます』『さらに、水平型は揚力型のみですが、垂直型は揚力型と抗力型の２つに分類されます』
『水平型の揚力型はプロペラ型・・・多翼型の4種類があります』『また垂直型の揚力型はダリウス型・・・。次に垂直型の抗力型は・・・』とブロックごとに読む方法があります。

ここで気をつけなければいけない事は単に「揚力型は」と読むと「水平型の揚力型なのか、垂直型の揚力型なのか」わかりません。『水平型の揚力型は』と１ブロック戻ったところからはじめるのがよいと思われます。
あるいは『風車には水平型と垂直型がありますが水平型の揚力型はプロペラ型・・』と下線部分を付け加えることによりハッキリ伝わるかもしれませんね。文章で書くと長く感じられますが、言葉では一瞬ですみます。

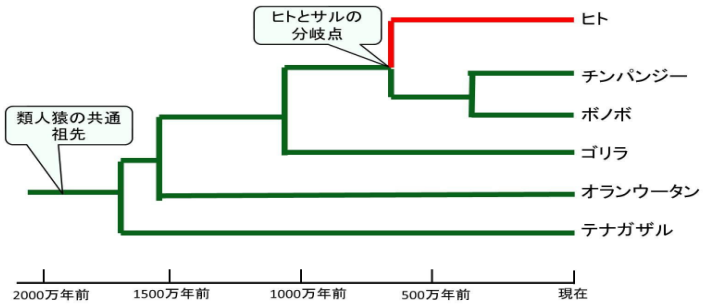
一般的に階層ごとに読む方法（図１）や、ブロックごとに読む方法（図2）、その他の方法が考えられます。上の図は単純なので階層で読もうと、ブロックごとに読もうと、結果的には同じようになってしまいました。



系統図　人はサルから進化した

人類の祖先だったサルたちは、温暖な気候で食糧に年中恵まれ，そして天敵も少ない森林の樹上で生活を行なっていた。豊かな森。人類やその他の種類のサルたちを含めた類人猿の祖先も，この恵まれた環境に育まれ子孫をつないできました。そして，　我々人類は数百万年もの非常に長い間サルと同じ道を歩んできたのです(図)。

しかしある時期，我々人類はサルと分岐しそのヒトたる進化をスタートさせました。人類の進化の最初のステージはこの大自然の森の中から始ったとされています。では、どういった過程で人類が進化していったのか？　・・・・



図：　類人猿および人類の進化の歴史

この図表では単位が表示されています。分岐点ごとにおおよその「年」を読み上げていく必要があります。利用者には目分量で年を読むことは知らせておいて下さい。読みは「類人猿の共通祖先はおおよそ1700万年前にテナガザルと分岐しました・・・」のようにおおよそ（「約」と言う言葉でもよい）を付けて読みます。

また、『類人猿共通の祖先は現在に近づくにつれ、テナガザル、オランウータン、ゴリラ、ボノボ、チンパンジー、ヒトと分岐した様子を表した図です』と全体像の説明を付け加えるとさらに分かりやすくなります。

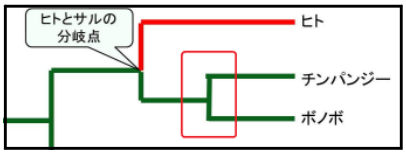
上記の系統図は文章からも「ヒト」が中心になっていることがわかります。そこで「ヒト」の進化をわかりやすく読み上げるのが順当だと思われます。

また「類人猿の共通の祖先」と「ヒトとサルの分岐点」の吹き出しがあります。この２つが注目点だと思われます。

それでは、皆さんは左から読み上げますか？　それとも右から?

１．まずは左から読む方法です。

「類人猿の共通祖先はおおよそ1700万年前にテナガザルと分岐し、おおよそ1500万年前にオランウータンと分岐・・・・おおよそ700万年前にチンパンジーやボノボと分岐しヒトとなりました」



ここで問題点が２つあります。おおよそ７００万年前に分岐したのは実は①「チンパンジーやボノボの共通の祖先との分岐であり、チンパンジーやボノボとの分岐ではありません」また、おおよそ400万年前に②「チンパンジーとボノボ」との分岐は読まなくてもよいかと言う問題です。

正確には「共通の祖先」の分岐ですが、一瞬で判断するのは難しいです。灰色がかった

「○」とします。次に400万年前の「チンパンジーとボノボ」との分岐ですが、読まなくて「よい」とまでは断言できませんが、読まない例も当然あります。

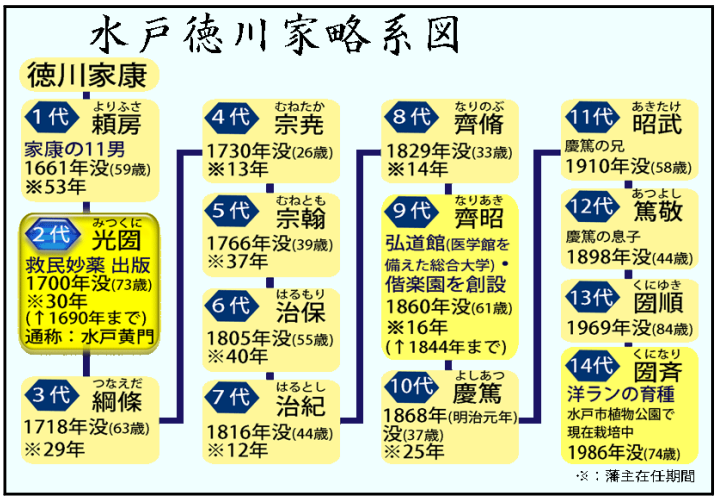
2．次に右から読む方法を説明します。

「ヒトはおおよそ700万年前にチンパンジーやボノボの共通の祖先と分岐しました。さらに遡り1000万年前にゴリラと分岐し・・・おおよそ1700年前にテナガザルと分岐するまでは類人猿の共通の祖先でした」

この系統図の場合、遡って読むことによりヒトと類人猿との分岐点が最初に出てくるので、ヒトの分岐点がハッキリする効果があります。

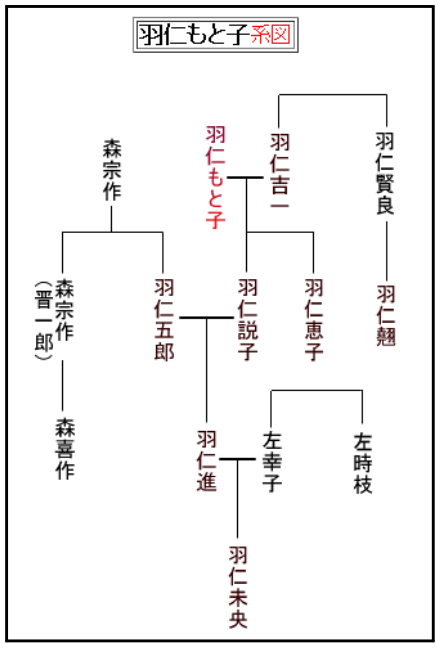
図表は時代の古い方から現代へ、数字の小さいものから大きいものへと読む必要は必ずしもありません。既成概念にとらわれず、普段から自分ならどう読めば理解しやすいだろうと考えることが説明上手への道となります。

家系図



左のような単純な家系図なら文章を読むように1代から順に読んでいけば間違いがありません。

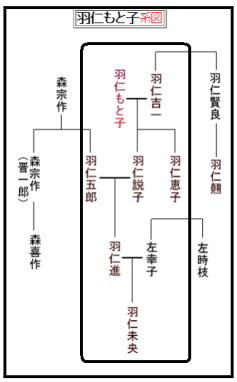
但し※は「藩主在任期間」なので『コメ印５３年』と読むのではなく『５３年間藩主在任（以下在任と読みますね）』、あるいは『藩主在任期間（以下在任と読みますね）５３年』と言葉を補足する必要があります。



上記のような簡単な家系図ならいいのですが、普通は右の家系図やもっと複雑なのが一般的です。

少し余談ですが、ここに記載されている人物は学者であったり、学校の創設者、実業家、国会議員、女優、映画監督、社会運動家・・・と、そうそうたる人ばかりです。しかし、標題から「羽仁もと子」さんを中心に読むことが相応しいと思われます。

ところで、人名を読むことができますか？　読めない時の処理として、まずは利用者にお尋ね下さい。『人名の読みを調べてみましょうか？　それとも読めない時は漢字の説明をしましょうか？　あるいは、妥当と思われる読み方で読みましょうか？』などと。



この家系図を説明する文章が添付されていないので何とも言えませんが、左の囲みのように、羽仁もと子さんから羽仁未央さんまでが流れの中心であり、左右に寄るほど傍系と思われます。（今回はこの前提で読みます）

『羽仁もと子（さん：敬称を入れても入れなくてもどちらでもかまいません）羽仁吉一（よしかず）には羽仁恵子、羽仁説子の子どもがいます（既成概念で「羽仁もと子・羽仁吉一夫妻と読もうと思いましたが、実際には夫婦かどうかは調べてみないとわかりません。何事も断定しない方がよいですね）。森宗作の子である羽仁五郎と羽仁説子間には、子ども・羽仁進がいます。羽仁進と左幸子の間には子ども・羽仁未央がいます』

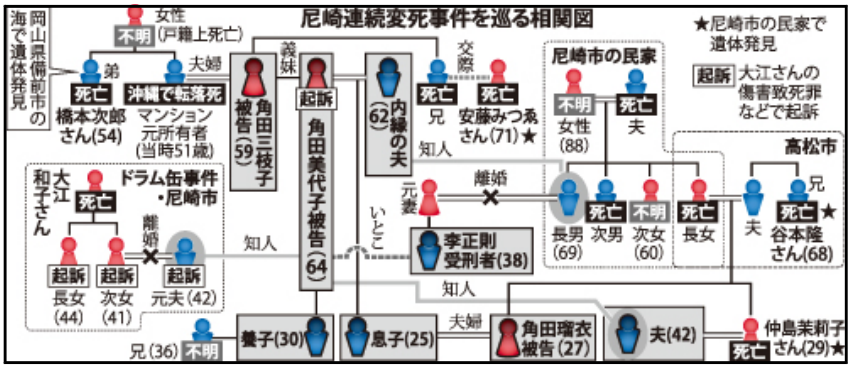
『（最初に戻り）羽仁もと子の配偶者・羽仁吉一には兄弟・羽仁賢良がいて、その子・羽仁翹（ぎょう）』がいます。

『また、森宗作には子ども・羽仁五郎、森宗作がいます。後者の宗作には丸カッコで晋一郎と書かれています。さらに、森宗作（晋一郎）には子ども・森喜作がいます』

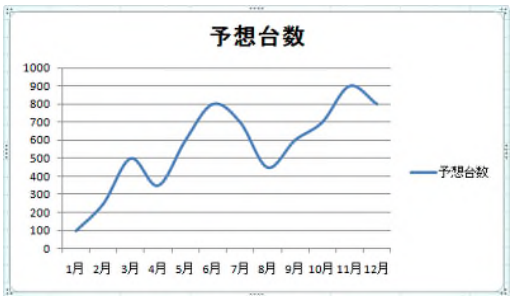
家系図を見ながらこの説明を聞くと、よくわかる気がするのですが、見ないで聞くと分かりづらいところが多々あります。

このシリーズでは一つの答えを出すのが目的ではありません。皆さまの意見を踏まえながら表現する力を高めているのが目的です。皆さまのご意見をお待ちしています。

上記の例は比較的単純な系統図ですが右の相関図は新聞に掲載された「尼崎連続変死事件」です。これだけ複雑になると一筋縄では解決できません。皆さまの名案・妙案をお待ちしています。



ボランティアの待田さんから「対面リーディング通信　２月号」に掲載された折れ線グラフについて以下のご意見をいただきました。有り難うございました。



この１年間、12ヶ月にはピークが３回あって　夫々（それぞれ）のピークはその前のものよりも高く（大きく）なっている（ここで、一息入れる、というのは、利用者が全体の様子をイメージ出来るようにするため）。

最初のピークは、３月で　500台。４月には少なくなるが それが谷で、また増えて ６月に２つ目のピークの800台になる。

その後、大幅に減って　８月に谷底になる。しかし、その後は増え続けて　１１月に一番高いピークの900台になる。それから　少し減って12月は800台で　１年が終わる。

この読み方では、ピークの数字は示すが、谷の数字は 読まない（改めて質問があれば答えれば良い）。読み聞かせは 正確でなければいけないけれど、精密・詳細であり過ぎては　親切な情報伝達とはいえない場合もあると思う。

寄り道・回り道

レポーター：福田（ふくだ） 直樹（なおき）

フクロウのみせ 大阪

【所在地】　大阪市北区天神橋 1-10-13
【行き方】　地下鉄谷町線・堺筋線「南森町駅」徒歩 7 分
　　ＪＲ東西線「大阪天満宮駅」徒歩 7 分
【営業時間】　火～金　13：00 ～ 21：00　土曜日　11：00 ～ 21：00
　　日・祝　11：00 ～ 20：00
　　月曜日定休（月曜日が祝日の場合は翌火曜日に振替）
【URL】　http://blog.livedoor.jp/owlfamily/archives/cat_967682.html

いきなりですが皆さんはフクロウはお好きでしょうか?

フクロウは「福籠（福がこもる）」や「不苦労（苦労がない）」などの字を当てられて、縁起物として置物など様々なグッズのモチーフになっています。愛嬌のある見た目もキャラクター向きなのかも知れませんね。

ただ、実物にはそうそう出会えるものではありません。今回ご紹介するのはそんなフクロウとのふれあいを楽しめるカフェです。

場所は大阪天満宮の近く、天神橋筋商店街を南へ抜けてすぐの所です。１時間の完全入れ替え制で１ドリンク付き１０００円（アルコール類は１２００円）。

店頭での当日予約のみというシステムで、いつ入れるかは運次第。休日などは予約が取れないこともあるようです。私は平日の昼間に行ったので、３０分程の待ち時間で次の回に入店できました。

時間になると予約順にテーブルへ案内されます。店内は真ん中に簡単な仕切りがあり、入り口から向かって左側がフクロウとのふれあいスペース、その奥がフクロウの休憩スペース、右側が喫茶スペースとなっています。

まず手を消毒し、飲み物を注文した後、フクロウとの接し方の説明があります。基本的なルールを頭に入れて、いよいよふれあいタイムのスタート。飲み物も運ばれてきますが当然のように誰も席には残っていません。お店側も心得ておられるのか飲み物にはラップが掛けられていました。

店内には２０羽程のフクロウがいますが、ふれあえるのは７～８羽。休憩中のフクロウも撮影はできるので、順番待ちの間も十分楽しめます。触るだけでなく、スタッフさんに頼めばフクロウを腕や肩に乗せてもらえます。大型種は皮手袋をして腕に乗せますが、間近で見る爪やくちばしはなかなかの迫力です。中型種は肩にも、小型種なら頭にも乗せられます。ただし鳥類は基本的に排泄の躾ができないので頭や肩に乗せる時にはそれなりの覚悟が必要です。

残り１０分になったところでふれあいタイムは終了、次の回に向けてフクロウの交代や餌やりなどの時間となります。席に戻ってすっかり忘れていた飲み物を飲み、精算へ。あっという間の１時間でした。

フクロウがお好きな方にはぜひお勧めです。臨時のお休みやメディアの取材などもありますので、事前にお店のブログなどをチェックしてからお出かけください。

人と人生

アンドレア ・ボチェッリ

― 神の歌声　今世紀最高のテノール歌手 ―

澤井（さわい） 稔（みのる）

アンドレア・ボチェッリ(発音はボチエルリと読むとわかりやすい)は1958年にイタリアの中部トスカーナ地方の片田舎に生まれました。実家は小さなぶどう園を営んでいました。６才から音楽を始め、すでにこのころから、彼はオペラを大変好んでいました。12才の時にサッカーボールを頭に受け、脳内出血を起こしたことで先天性緑内障が悪化して失明することとなりました。高校を卒業後、様々な障害を乗越えて彼はピサの大学で法律を学び、法律の博士号を取得して弁護士として一年間仕事をしました。

しかし歌への強い夢を捨て切れず勉強を続けてきた彼は、世界的に有名なフランコ・コレッリ（イタリアの有名テノール歌手）に師事したことをきっかけに、ルチアーノ・パヴァロッティ(イタリアの有名オペラ歌手で世界三大テノールの一人)とズッケロ(イタリアのシンガーソングライター)に見出され、1994年遂にプロデビューを果たしたのでした。

イタリアン・ポップス、カンツォーネの登竜門サンレモ音楽祭の新人部門で優勝し、アルバム２枚を発表した後、そのベスト盤がヨーロッパ中で大ヒットし、彼のテノール・ボイスの魅力が広く世界に受け入れられたのでした。1997年の実質的な世界へのデビューアルバム「ロマンツァ」は全世界で3000万枚以上のセールスを記録しました。元は彼のために作られた「コン・テ・パルティロ」という曲は、後にタイトルと歌詞の一部を英語に改めて「タイム・トゥ・セイ・グッドバイ」としてサラ・ブライトマンとデュエットしたバージョンが発売され、1500万枚以上のセールスを記録しました。

今、私の目の前には１枚のＣＤがあります。アルバムタイトルは「アモーレ」で名曲「アマポーラ」を始め「ベサメ・ムーチョ」「枯葉」等のスタンダードナンバーを散りばめて、さらに、もう一人の盲目の天才歌手あのスティービー・ワンダーをフィーチャーした曲まで入っているという豪華な一枚です。私のお気に入りのこの一枚は魔法の一枚です。どんなに憂鬱なことが目の前に山積みになっていても、ひとたび聞けば、なんとあら不思議!全ての憂さが何処かに吹き飛んでしまうこと請け合いです。

他にも2000年に発売して大ヒットとなった「ヴェルディ・アリア集」など名盤を挙げればきりがない程ですが、とにかく彼のこのゆったりとした軽さと豊かさの中に身を置き、何も考えずにただただ目の前を時間が過ぎて行くのにまかせる至福は、何ものにも替えがたい休息をあなたにもたらすでしょう。

哀愁の低音・慈愛の中音・感嘆の高音。いずれも彼の歌声を評する言葉です。彼のスタイルは一部のアカデミックなクラシックファンの間では現在でも、高い評価を得ているとはいえません。しかし、彼の歌声はその驚嘆の音を超えて魂そのものです。嘗て一世を風

靡したあのフェデリコ・フェリーニ（イタリアの映画監督）の懐かしい映画の様に、ニノ・ロータ（イタリアの作曲家）の映画音楽の様に、多くの人を元気づけて、あっけらかんとシンプルに全てを肯定してくれる、そんな優しさに溢れています。悩める者はやがて救われる。そんな暗示の光が灯されているのです。是非一度聴いてみて下さい。

なお世界的な成功を手に入れたアンドレア・ボチェッリですが、いまもトスカーナの生まれ育った牧場の近くに住んでいます。数頭の馬を飼い、休みの日には周辺を馬に乗って散歩をするそうです。州都フィレンツェ、ピサ、シェーナ等、多くの古都を擁するトスカーナ州の多くの文化遺産や自然環境の中で育まれてきた彼の神の歌声は、これからも多くの人々に感動を与え続けることでしょう。

写真は　「アモーレ～オペラ・アリア集」
「燃える心を～ヴェルディ・アリア集」
のジャケットです。

感謝を込めて　藤堂 麻須子 さん

藤堂さんは当館だけでなく西宮の図書館や後進の育成など幅広く活動されていて、当館では対面リーディングや録音製作でも活躍されています。

活動を始めて40年以上、本当に有り難うございます。藤堂さんが録音された図書の中には田辺聖子の作品が数多くあり、聞いていると田辺聖子さん本人が録音されているのではと錯覚するほどです。僕の頭の中では完全に混同されていて、思わず「お聖さん」と呼びかけそうになるほどです。

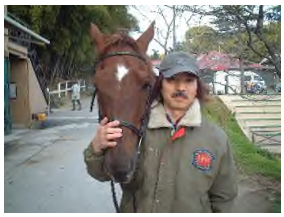
対面では利用者から逆指名（基本的には受け付けていないのですが）を受けたりと、豊かな話術はもとより、あたたかい心に感動されるのではないでしょうか。

今後ともご活躍を期待しています。

お世話になりました

大学卒業したての初々しかった青年は、はや65歳を迎えてしまいました。振り返ると懐かしく、嬉しい、楽しいことばかりが思い浮かびます。最初は録音製作、そして読者サービス、総務、点字製作と図書館畑を一回りして、60歳定年を期に古巣の図書情報サービス係へと異動しました。

時には背伸びして、時には反発もしたり、その時々に全力で働かせてくれたこの職場の懐の深さに本当に感謝しています。



いい時代に生まれ、いい仲間に恵まれ、そして素晴らしいボランティアとのふれあい。僕に人生にとって最高の宝物となりました。

本当に有り難うございました。

これからは好きな旅行と山登り、乗馬三昧と、遊ぶことばかり考えています。そして、ボランティアとして、もう少し関わらせていただきたいと思っています。よろしくお願いします。木村謹治

▼春は光とともにやってくる▼「畳の目」一つづつ長くなり▼梅を咲かせ▼桃を咲かせ▼桜を咲かせる▼桜の季節は出会いと別れの季節▼昔から繰り返されてきた光景が今年も　K

日本ライトハウス 情報文化センター
550-0002 大阪市西区江戸堀1-13-2
06-6441-0015（代表）
06-6441-0039（サービス部）